

Workshops on Preparing Future Faculty at Hokkaido University

Mami Kawachi*

Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba

北海道大学「大学院生のための大学教員養成講座」報告

河内 真美 **

筑波大学大学院人間総合科学研究科

Abstract — In March and July 2010, Hokkaido University held 5-day workshops named, “Preparing Future Faculty : An Introduction to Teaching and Writing for Graduate Students.” Two lecturers were invited from the University of California, Berkeley. Each workshop had 30 participants, 6 tutors, 1 coordinator and many observers.

During the 5-day program, the teaching sessions addressed the question of, “how to promote students’ learning,” especially considering course syllabi, grading rubrics, large lecture courses, and professional standards. Principles to promote students’ learning were not only discussed in class, but were also applied to the workshop itself. The writing sessions dealt with conference proposals, journal articles, abstracts, and editing. Tutors played a crucial role in assisting the participants. They facilitated group discussions in class, answered questions and suggested ways to improve the participants’ work in tutorial sessions. Tutors’ meetings served as the time to solve any issues raised and, more importantly, as the place to transfer skills of experienced tutors to new ones.

The workshops were a valuable opportunity for starting to develop teaching and writing skills needed for future faculty. The demand for this kind of opportunity is high among graduate students in Japan. The workshops indicated the importance of providing training opportunities for both teaching and writing. For Preparing Future Faculty programs to take root in Japanese universities, a human resource development system is crucial to transfer the knowledge and skills of experienced lecturers and tutors. In addition, the programs should be prepared in Japanese.

(Revised on 26 August, 2011)

1. はじめに

2000年頃から、日本のいくつかの研究大学においては、「プレFD」と一般的に呼ばれる大学院生を対象とした大学教員養成のための取り組みが開始さ

れている⁽¹⁾。この背景には、日本の大学がユニバーサル段階を迎え、学生の学習ニーズや学力が多様化しているなかで、研究能力のみではなく高い教育能力を備えた大学教員が従来以上に求められていることがある⁽²⁾。2008年の中央教育審議会答申「学士

*) Correspondence: Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, 1-1-1 Tennodai, Tsukuba, Ibaraki, Japan 305-8572

**) 連絡先：305-8572 つくば市天王台 1-1-1 筑波大学大学院人間総合科学研究科教育学専攻

課程教育の構築に向けて」においても、「教育研究上の目的に応じて、大学院における大学教員養成機能（プレFD）の強化を図る」ことが大学に期待されるとし、学士課程教育の充実を支えるひとつの方策として大学院における大学教員養成機能の充実が重視されている⁽³⁾。今日多くの大学で導入されているTA制度のもとでの活動や研修も、大学院生の教育能力を高めるための方法ということで大学教員養成（Preparing Future Faculty：以下、PFFと表記する）の一環と捉えられるようになってきた⁽⁴⁾。

以上のようなPFFに関わる動向がみられるようになったなか、北海道大学では、2010年3月及び7月の2回にわたり、「大学院生のための大学教員養成講座：ティーチングとライティングの基礎」（以下、PFFワークショップと表記する）が行われた。これは、アメリカのカリフォルニア大学バークレー校（以下、UCバークレーと表記する）から2名の講師を招き、「将来の大学教員・研究職を目指す大学院生向けの演習や講義・講演を交えた英語による短期集中型キャリア養成プログラム」⁽⁵⁾として企画・実施されたものである。

本稿では、一参加者の視点から、このPFFワークショップの概要と特徴、成果を報告する。そこから、日本の研究大学におけるPFFプログラムのあり方に対する示唆や課題を考察したい。

2. PFFワークショップの概要

2.1 出席者など

PFFワークショップは、高等教育機能開発総合センター（当時）の主催により、第1回が2010年3月18日～24日（20・21日は休み）、第2回が2010年7月21日～27日（24・25日は休み）と5日間のプログラムとして行われた。第1回・第2回ともに、北海道大学大学院生を中心とする参加者30名、チューター6名、コーディネーター1名、見学者（第1回が約15名、第2回はテレビ会議システムの利用による北海道大学函館キャンパスの見学者を含めて35名）、講師2名、及び主催者側の教職員約10名が出席した。2名の講師は、UCバークレーのGSIセンター（Graduate Student Instructor

Teaching & Resource Center）⁽⁶⁾ 長であるリンダ・フォンヘーネ氏と研究支援部（Academic Services）長のサブリーナ・ソラッコ氏である。また、参加者は30名に限定して募集された。これは、グループ討論を始めとする様々な学習活動をワークショップ形式で効果的に行うためである。各回とも希望者数が大きく上回ったため、専門分野の多様性を考慮して30名が決定された。30名のうち、日本人学生と留学生の割合は約2:3であった。なお、参加者には、プログラム全日程への参加と最終プロジェクトの提出に加えて、事前に自己紹介エッセー（英語700語）と事後にPFFワークショップ評価文（英語800語）が求められた。報告者は、第1回に参加者として参加し、その経験を踏まえて第2回にチューターとして参加した。

2.2 PFFワークショップの位置づけ

PFFワークショップは、UCバークレーで毎年開講されているPFF夏期講座（Summer Institute for Preparing Future Faculty）を基に、日本の大学院生が置かれた状況に合わせて再構成されたものである。また、筑波大学・北海道大学共催の国際シンポジウム「高等教育におけるプロフェッショナル・ディベロップメント」（2009年7月）において実施されたワークショップの拡大版である⁽⁷⁾。

UCバークレーにおいてPFFのための全学的プログラムは、GSIを中心とする大学院生に対してティーチング能力の育成を支援するGSIセンターと、アカデミック・ライティング能力の育成を支援する研究支援部によって担われている。通常は、GSIセンターと研究支援部がそれぞれ独自に研修会、ワークショップ、個別相談、セミナー、授業科目等を提供しているが、両者が年1回共同で実施しているのがPFF夏期講座である。PFF夏期講座は、大学院生が大学院から将来のキャリアへ移行するにあたり、教育・研究生生活のあらゆる側面において秀でた能力を身につけることを目的に、2003年から毎年5～7月の6週間にわたり開講されている。対象は、博士候補資格（candidacy）を得た大学院生約40名である。参加学生は、高等教育及び大学教員生活の現状等を扱うコア科目「大学院生から大学教員へ」と、選択科目として①「論文の推敲、アカデミック・ラ

イティング, 学術出版」または②「ティーチング・ポートフォリオの作成」のどちらか, 合計2科目を受講する。

今回の PFF ワークショップは, PFF 夏期講座の選択科目, ①「論文の推敲, アカデミック・ライティング, 学術出版」, 及び②「ティーチング・ポートフォリオの作成」のなかで日本の大学及び大学院生に適切な内容を中心に組み立てられている。ただし, すべての参加者がティーチングとライティング両方のセッションを受けることができた点は, PFF 夏期講座との大きな違いである。

2.3 プログラムと学習課題

PFF ワークショップは, 「専門分野を問わず, 大学院生が, 大学レベルの教育職をキャリアとして考えている者の基盤として, 効果的な英語によるコミュニケーション・スキルを通して教育及び研究を行うための基礎的スキルと知識を得る」という趣旨のもと, 各日3セッション, 5日間合計15セッションで構成された。第1回 PFF ワークショップの具体的なプログラムを次ページの表1に示す。

なお, 第2回 PFF ワークショップのプログラム内容も基本的には同様であった。相違点は, 第1回でのパネル・ディスカッション「国際的キャリアの計画」が, シンポジウム「国際的キャリア養成への道すじ」と特別講演「学びにおけるユニバーサルデザインの高等教育への適用」となり, それに伴って講演者が変わったことである⁽⁸⁾。

また, 表1に示したセッションの他, 講師のオフィスアワーが毎日セッション終了後に1時間, チューターによるチュートリアル時間が初日を除く毎朝及び昼休みの合計1.5時間(昼休みのチュートリアルは第2回 PFF ワークショップのみ)設けられており, 希望する参加者はセッションや課題についての個別質問・相談をすることができた。

上記のプログラムを通して, 参加者には, ティーチングで1つ, ライティングで1つ, 合わせて2つの最終プロジェクトに取り組むことが求められた。課題として, ティーチングとライティングのそれぞれに2つの選択肢が与えられた。以下は, 第1回で提示された最終プロジェクトであるが, 第2回もその内容は同じである。

<1> ティーチング (以下2つから1つを選択)

【選択肢1】 ティーチングに関するセッションで学んだことを参考に, 将来大学教員になった際に教えた授業のシラバス草案を作成しなさい。シラバスには, 授業概要, 授業の主部分についての学習目標, 授業方針を含めること。また可能な限り, 授業の各部分についての学習目標に沿った課題や参考文献の概略を示してください。3月23日(火)にシラバスを提出すること。

【選択肢2】 ある授業のための大きな課題またはプロジェクト及びその課題に対する成績評価基準を作成しなさい。学生が学期末にすべてをやることにならないよう, 学期を通して課題をどのように細分化するかについても示すこと。3月23日(火)に, 課題内容及び細分化についての説明と成績評価基準を提出すること。

<2> ライティング (以下2つから1つを選択)

【選択肢1】 発表したい学会大会の公募情報 (call for proposals) を見つけなさい。ガイドラインを確認して, 発表計画を書きなさい。公募情報に示された判断基準をすべて満たしているかを確認すること。また求められていれば要旨を含めること。3月23日(火)に, 公募情報及びあなたの発表計画とその要旨を提出すること。

【選択肢2】 あなたの研究を発表するのに適した学術雑誌を見つけてなさい。そして, 論文投稿規程を確認しなさい。すでに完成した論文があれば, その論文が投稿規程に従っているかを確認しなさい。論文がない場合は, 投稿する論文の概要を作成しなさい。また, 論文あるいは論文概要に添える送付状を書きなさい。3月23日(火)に, 投稿規程, 論文あるいは論文概要, 及び送付状を提出すること。

課題文に指示されているように, 参加者は作成した最終プロジェクトを第4日のセッション終了後, 講師に提出する。また, 自分のグループ⁽⁹⁾のメンバーにもメモ書きを添えて渡す。このメモ書きには,

- ① どの課題を選んだか (例: シラバスの作成),
- ② 背景情報 (例: どのような授業のためのシラ

表 1. 第 1 回 PFF ワークショップのプログラム

日時	セッションタイトル	内容
3月18日(木)		
10:30～12:00	1. 開会: 基調演説とイントロダクション	趣旨, 北海道大学の TA 制度・研修や国際化の取組, UC バークレーの取組
13:00～14:30	2. ティーチング1: ティーチングの基礎	よい授業の特徴・原則, ブルームの教育目標分類, 統合された授業設計
14:45～16:15	3. ライティング1: ライティングの基礎	アカデミック・ライティングとは何か, 読者・分野や様式, 書く習慣
3月19日(金)		
10:30～12:00	4. ティーチング2: 授業シラバスと学習目標の設計	サンプル・シラバスの分析, よいシラバスの特徴・要素, 授業概要の作成
13:00～14:30	5. ライティング2: 学会大会発表計画の作成と申し込み	学会大会のテーマと申込要領の吟味, 発表計画サンプルの評価
14:45～16:15	6. パネル・ディスカッション: 国際的キャリアの計画	北海道大学の国際化戦略及び国際機関等に おけるキャリア
3月22日(月)		
10:30～12:00	7. ティーチング3: 成績評価基準の作成と活用	成績評価基準の種類・意義, 成績評価基準を用いた評価と基準作成
13:00～14:30	8. ライティング3: 国際学会誌への論文投稿	適切な雑誌の選択, 投稿規程の吟味, 送付状の作成
14:45～16:15	9. ライティング4: 論文要旨の執筆	要旨の種類と活用, 効果的な要旨の要素, 要旨の作成とサンプル要旨の編集
3月23日(火)		
10:30～12:00	10. ティーチング4: 大型講義授業の教えかた	大型講義授業の問題点と解決方法, 大型講義授業をする際の注意点
13:00～14:30	11. ティーチング5: 専門職としての規範と倫理	倫理的規範の必要性, 事例検討
14:45～16:15	12. ライティング5: 論文の推敲・校閲	推敲の種類, 効果的な文章にするための校閲
3月24日(水)		
10:30～12:00	13. プレゼンテーション1	ティーチングの最終プロジェクトの発表
13:00～14:30	14. プレゼンテーション2	ライティングの最終プロジェクトの発表
14:45～16:15	15. 閉会:まとめ	

- バスか),
- ③ どのような点についてフィードバックが欲しいか,

などを記しておく。そして、各参加者は最終日のセッションが始まるまでに、他のメンバーの最終プロジェクトに対するコメント（良かった点、改善できる点など）を書いてくる。

最終日には、グループごとに部屋を分かれ、この最終プロジェクトについての発表が行われた。具体的には、ひとりの参加者が自分の最終プロジェクトの内容を説明した後（5分間）、他の参加者がそれに対するコメントを口頭で述べ（5分間）、そして次の参加者に移るといように進められた。

3. PFF ワークショップの特徴

3.1 学習内容の実践としてのワークショップ方法

ティーチングに関するセッションの内容は、学生の学習を促進するためにいかに授業を設計し実践するかということにつぎる。最初の「ティーチングの基礎」では、よい授業実践の原則として、

- ① 学生と教員との接触を促進する、
- ② 学生間の協同を深める、
- ③ アクティブ・ラーニングを促進する、
- ④ 迅速なフィードバックを返す、
- ⑤ 課題等に対する時間（時間管理）を強調する、
- ⑥ 学生に高い期待をしそれを伝える、
- ⑦ 多様な才能や学習方法を尊重する、

という7点⁽¹⁰⁾が紹介され、他のセッションはこれらの7原則を実現するために、授業シラバス、課題と成績評価基準、大型講義授業、及び倫理的側面という具体的状況においてどうすればよいかを考えるものであった。

一方、講義や議論を通して学ぶのみではなく、7原則はPFFワークショップ自体を行う方法として実践されていた。たとえば、「①学生と教員との接触を促進する」ことは、講師のフォンヘーネ氏とソラッコ氏が、参加者の名前を2日目には覚えていたこと、

休み時間やオフィスアワーにおいても参加者とのコミュニケーションを積極的にとっていたこと、担当ではないセッションにも見学者として参加していたこと、などを通して図られていた。他にも、各セッションの最初にはセッションの学習目標が明示され、学習目標を達成し達成度を確認するためのさまざまな活動が取り入れられていたこと（⑥学生に高い期待をしそれを伝える、⑦多様な才能や学習方法を尊重する）、学習内容が知識として一方向的に与えられるのではなくグループ活動等を通じた知識の生成がめざされていたこと（②学生間の協同を深める、③アクティブ・ラーニングを促進する）、最終プロジェクトに取り組むためのステップになる小課題が各セッションに組み込まれていたこと（⑤課題等に対する時間管理を強調する）、関連文献や情報を豊富に示した資料が与えられたこと（③アクティブ・ラーニングを促進する、⑦多様な才能や学習方法を尊重する）など、PFFワークショップのあらゆる場面において上記の7原則が適用されていた。

「よい授業を実践する方法」を仮想設定のなかで知識として理解し考えると同時に、授業を受ける学生の立場で実践的に体験することで、参加者が授業実践のための効果的な方法を具体的に描きやすくなるとともに、獲得された知識・スキルが将来活用される可能性が高くなるという効果があったと考えられる。

3.2 参加者の学びを最大化するためのチューター

前述のように、30名の参加者に対し、チューター6名とチューターを束ねるコーディネーター1名がついた。第2回PFFワークショップでは、6名のうち、3名は第1回PFFワークショップにもチューターとして参加し、残り3名は参加者として参加している。なお、報告者を除く5名は、北海道大学でコーディネーターが中心となって開設していたアカデミック・ライティング授業や試験的に設置されたラボラトリーの受講経験がある北海道大学の大学院生であった。

チューターの任務は、参加者の学びを促進するために、講師と参加者の仲介者となることであった。具体的な業務内容は以下のとおりである。

事前

・「英語のライティング授業におけるチューターの役割」に関する作文執筆

ワークショップ期間中

- ・セッション中：グループ討論・活動におけるファシリテーション、最終日のプレゼンテーションにおける司会とタイムキーパー
- ・授業時間外（チュートリアル含む）：
参加者の質問や相談への対応、助言
- ・セッション後：チューター・ミーティング、講師への報告（eメール）
- ・その他：使用部屋の机・椅子等の設置

事後

- ・「チューターによるワークショップ評価」作成

30名の参加者に対して、講師2名の他にチューターが6名、コーディネーターが1名という環境は、「贅沢」と言っても過言ではないであろう。しかし、英語能力に幅があるのみではなく、さまざまな文化的背景や PFF ワークショップへの期待をもつ参加者ひとりひとりが満足できる充実したプログラムを実現するためには、必要な人数であったように思われる。それは、プログラム全体を通して、参加者と講師との関係を築き、参加者の学びを促進するためのきめ細やかな支援を行ううえで、チューターが欠かせない役割を果たしていたからに他ならない。

セッション中におけるチューターの主な業務内容は、グループ討論を促進することであった。そこでは、「全員が参加すること」が最も重視された。すなわち、全員が「何を今議論することが求められているのか」を理解すること、異なる意見を尊重する雰囲気をつくること、全員が平等な発言機会を得ることの3点を保証することが、チューターには求められた。特に、全員が平等な発言機会を得るためには、なかなか発言しない参加者に発言を促すのみではなく、話し「すぎている」参加者の発言を途中で適切な形で止めること、言い換えれば話すことが得意な参加者に討論を任せないことも必要となり、そのバランスは難しい。しかし、全参加者が「自分はこの

グループの一員である」ことを実感し、自分の意見を出し他者の意見を聞くことを通して生じる相互の学びを促進するためには不可欠な「ルール」であり、中立的立場で介入できるチューターはこの「ルール」を維持するうえで重要な存在であった。

その他、チュートリアル等の時間には、課題についての補足説明や参加者の最終プロジェクトに対する助言を行ったり、空き時間には参加者が PFF ワークショップに対してどう感じているか、直面している問題はないかなどを話したりした。これらのチューターによる参加者への直接的な支援は、講師の期待を参加者に伝え、参加者それぞれの学習目標・期待に応じて細やかに対応するうえで非常に効果的であったと思われる。

他方、講師とチューターは役割分担をしつつも、ひとつのティーチング・チームとして参加者の学びの支援に臨んでいた。講師とチューターのコミュニケーションは、①プログラム開始前の顔合わせ、②毎日のセッション終了後の報告を中心に図られた。顔合わせでは、チューターに対して期待している役割が講師から述べられ、チューターの権限についての理解が共有された。特に、講師とチューターの間では、グループ討論時にチューターがどの程度自分の意見を述べるのがよいかという点や、アカデミック・ライティングに対する考えのずれがみられたため、プログラム開始前に、チューターの役割・権限等を確認することは非常に重要だったと思われる。

また、チューターは毎日のセッション終了後に、参加者の状況や抱えている問題などについての報告を講師に送ることが求められた。例えば報告者は、グループ討論での平等な発言機会の保証の仕方や自分と異なる意見に対して否定的な見方をする参加者への対応方法といった討論運営に関する相談から、講師の話し方に関する参加者の要望まで多様な内容を書いた。それに対して講師は、チューターに返信するとともに、必要な場合には出された問題点や改善策について翌日取り上げ即時に対応した。この方法により、講師は必要以上に時間を費やすことなく、各参加者の状況を把握し問題に対応することができた。同時に、チューターの意見を尊重する講師の態度も示され、両者の間に信頼を築くうえで役立った。

さらに、毎日のチューター・ミーティングは、直面した具体的な問題やその解決策等についてチュー

ター間で共有する貴重な機会であった。そこでは、グループ全員の意見を引き出しながら討論を進めるにはどのように指示するのがよいか、英語による講師の話の話を十分に聞き取れていない参加者個人にはどう対処するのが適切か、などについて話し合った。ミーティングは、具体的な解決案を検討する実務的な場であったのみではなく、第1回のチューター経験者から第2回で新しくチューターになった者へのスキルの受け渡しの場としても機能した。

4. 成果

PFF ワークショップで作成された最終プロジェクトの例として、報告者がティーチング課題に提出したシラバスを表2-1～表2-3に紹介する。なお、PFF ワークショップの際に英語で作成したものを翻訳した。

表2-1. 報告者の作成したシラバス（その1）

科目名：国際教育論

開設時限 2010年度1学期 火・木4限

担当教員 *****

E-mail *****@*****

研究室 *****棟****室

オフィス・アワー 水曜日16:00～17:00, および随時(予約制)

授業概要

過去60年間、国際社会においては人々の教育への権利を保障するための色々な取り組みがなされてきました。しかし現在でも、約7500万人の子どもが学校教育を受けることができず、約7.8億人の成人が読み書きができないと言われていています。

「国際教育論」では、国際的な視点から教育に関する理論と現状を紹介します。具体的には、現在の世界における教育状況、教育と発展・開発の関係性、国際機関・各国政府・NGO（非政府組織）による教育援助、そして植民地主義・ポスト植民地主義とグローバル化の教育への影響といったテーマを扱います。

この授業を通して、国際的な視野から、世界の国々、特に「途上国」における現在の教育の状況と課題を説明し、批判的に分析するためのスキルと知識を身につけることを目標としています。

授業は以下の4つのセクションに分かれています。

- 1) 世界における教育の現状と課題
- 2) 国際教育援助
- 3) 教育と発展・開発の関係性
- 4) 植民地主義、ポスト植民地主義、グローバル化とその教育への影響

使用文献

Chabbott, C. (2003). *Constructing Education for Development: International Organizations and Education for All*, New York, NY: RoutledgeFalmer.

Hoogvelt, A. (2001). *Globalization and the Postcolonial World: The New Political Economy of Development* (second revised edition), Baltimore, MD: The John Hopkins University Press.

Rizvi, F. & Lingard, B. (2010). *Globalizing Educational Policy*, New York, NY: Routledge.

上記の文献は、大学の書籍部で購入可能です。

以下の論文については、授業ウェブページに掲載します。

Adams, D. (2002). *Education and National Development: Priorities, Policies, and Planning*, Hong Kong: Hong Kong University Press.

Kamens, D. & McNeely, C. (2010). Globalization and the Growth of International Educational Testing and National Assessment. *Comparative Education Review*, 54 (1), 5-25.

表 2-2. 報告者の作成したシラバス (その 2)

授業方針・要件

出席と参加

授業には毎回出席してください。病気など正当な理由がある場合は、メールまたは直接、授業前に連絡してください。この授業では、討論やグループワークを行いますので、クラス全体の学習を促進するうえでみなさんの積極的な参加が不可欠です。「成績評価方法」に書いてあるように、出席・参加状況も成績に反映させます。

課題

課題については、シラバスの「授業計画」欄及び授業ウェブページに掲載しています。授業では文献に基づいた討論を行いますので、各回に指定された文献は授業前に読んできてください。討論がある回には、授業終了時に討論についてのコメントを書いてもらいます。(例えば、討論テーマについてどう思ったか、他の学生の意見を聞いて何を学んだかなど)。また、合計 3 回のレポート課題を出します。テーマと提出日はシラバスの「授業計画」欄を確認してください。各レポートの長さは 3～4 ページとします。提出が遅れると成績に影響しますので注意してください。

成績評価方法

- ・出席と積極的な参加 : 20%
- ・討論コメント : 14%
- ・レポート (3点) : 66% (各 22% ずつ)

オフィスアワー

授業や課題について質問がある時は、オフィスアワーをぜひ活用してください。質問はメールでも受け付けます。また、場合によっては、オフィスアワーに来ていただくこともあります。

学生間のコミュニケーション

レポートは各自が個別に書かなくてはなりませんが、内容を考え深めるうえで他の学生と話し合うことをお勧めします。話し合いには、授業のウェブサイトも使うことができます。ウェブサイトの使い方については資料を配布しますが、何か問題があった場合は連絡してください。

不正行為

大学の規則に基づいて不正行為 (剽窃) には厳しく対応しますので、規則をよく知っておいてください。剽窃に関する大学規則は、大学のウェブサイト (http://*****) で確認できます。

授業計画

第 1～2 週 世界における教育の現状と課題 4 月 13・15・20・22 日

学習到達目標

- ・「途上国」における教育の現状と問題を述べる
- ・十分な教育が受けられないことに起因する問題を認識する
- ・教育問題の解決における国際社会の役割について説明する

文献: Chabbott, C. (2009). pp.136-161 & pp.173-180.

表 2-3. 報告者の作成したシラバス (その 3)

<p>第3～5週 教育への国際援助</p> <p>学習到達目標</p> <ul style="list-style-type: none"> ・国際教育援助に関わっている援助機関の種類を挙げる ・各援助機関の性質を述べ、解釈する ・国際教育援助における NGO の歴史を述べるとともに、NGO の長所と短所を他の援助機関と比較する <p>文献：Adams, D. (2002). “Developing More Effective International Assistance” Chabbott, C. (2009). pp.1-135 & pp.162-172.</p> <p>レポート1 提出日：5月25日</p> <p>国際教育援助における NGO の歴史と役割を説明するとともに、他の援助機関（各国政府、世界銀行、国際連合機関など）と比較して NGO の長所と短所を述べなさい。説明のなかでは、例として教育援助を行っている NGO を2つ選択し、それらの NGO の活動について触れながら具体的に記述しなさい。</p>	<p>4月27日、5月6・11・13・18・20日</p>
<p>第6～7週 教育と発展・開発の関係性</p> <p>学習到達目標</p> <ul style="list-style-type: none"> ・国際社会における教育と発展・開発の関係性に関する認識の変化を説明する ・援助機関・援助国の教育援助に関する政策とプログラムを分析し、評価する <p>文献：Adams, D. (2002). “Education, Economic Growth, and Social Change” “The Changing Pattern of Policy and Planning” “Emerging Education Trends and Strategies”</p> <p>レポート2 提出日：6月10日</p> <p>援助機関を1つ選び、その機関の教育援助に関する政策とプログラムを見つけなさい。その援助機関が教育分野のなかで最も優先している分野を確認し、その機関の任務や性質と照らし合わせて優先分野を分析しなさい。</p> <p>グループ・ワーク</p> <p>レポート2の下書きを作成して、6月3日の授業に持ってきてください。指定されたグループで、あなたのレポートについて説明してください。他の学生からの意見やコメントをもとに、レポートを書き直して6月10日に提出してください。</p>	<p>5月25・27日、6月1・3日</p>
<p>第8～10週 植民地主義、ポスト植民地主義、グローバル化とその教育への影響</p> <p>学習到達目標</p> <ul style="list-style-type: none"> ・歴史的観点から、現在の世界の教育状況と問題を解釈する ・一国の教育政策・実践に影響を与える国際的な要因を認識する ・今日、教育を通して培うことがめざされている知識や能力を分析する <p>文献：Hoogvelt, A. (2001). Kamens, D. & C. McNeely (2010). Rizvi, F. & B. Lingard (2009).</p> <p>レポート3 提出日：7月1日</p> <p>授業で配布するリストから1カ国選びなさい。その国について、現在の教育の状況と問題を説明し、歴史及び国際的影響という視点から分析しなさい。</p>	<p>6月8・10・15・17・22・24日</p>

PFF ワークショップの直接的な成果（プロダクト）は、上記に作成シラバス例を示したようなティーチングとライティングの最終プロジェクト、及びそれに対するグループメンバーからのフィードバックである。初日に最終プロジェクトの内容が伝えられた際にはその困難さに多くの参加者が不安を感じていた。特に日本の大学院生が体系的な教育を受ける機会がほとんどないティーチングに関しては、将来自分が大学教員として教えたい授業を想定し、その授業のためのシラバスや課題と成績評価基準を作成するには、どこから始めればいいのかすらイメージが湧かない人も多かったと思われる。それにもかかわらず全参加者が最終プロジェクトをやり遂げることができたのは、達成のためのステップとなる情報や小課題がプログラムのなかに適切に配置されていたこと、及びオフィスアワーやチュートリアルにおける細やかな指導があったことによるものであろう。ただし、ティーチングにしてもライティングにしても1週間のPFFワークショップを経て一朝一夕にスキルが向上することはなく、今後獲得した知識・スキルや配布資料等をもとに、実践しながら継続的に高めていくことが参加者には期待されている。

また、直接的な学習内容以外の成果として、ワークショップや授業を運営するためのスキルの獲得を挙げることができる。特に、講師やチューター、TAなど複数の関係者が携わっている場合に、どのようにチーム化し、参加者や学生の学びを促進するためにどのようにチームとして活動するのか、チーム全体としての力量をどのように高めていくのかという点は、TA研修会等におけるワークショップや大学の授業を設計・実施するうえで非常に参考となるものであった。

以上の成果を、報告者は、筑波大学で2010年4月6日に試行的に実施されたTA研修会における討論演習等や、同年11月に開講された大学院共通科目「職業としての大学教育」におけるシラバス作成ワークショップに実施側として関わった際に、不十分ではあるが活かすことができた。

5. 日本の大学におけるPFFプログラムへの示唆と課題

ティーチングやライティングに関して体系的に学ぶ機会が少ない日本の大学院生にとって、PFFワークショップは、将来大学教員をめざしている者に限らず、教育・指導や研究論文をはじめとするアカデミック・ライティングのための能力を獲得し磨いていくための第一歩として貴重な機会となったであろう。このような機会に対する大学院生のニーズが決して低くないことは、英語でプログラムが実施されるにもかかわらず、第1回・第2回ともに定員の2～3倍の応募があったことから窺える。この背景には、ライティングは将来の大学教員としてというよりも、まずその職業を得るために必須の研究業績という点から大学院生にとって切実な問題であること、一方、大学教員になるうえで研究業績のみではなく教育経験が問われるようになってきた現在にあっては、ティーチング能力向上の必要性に対する意識も以前と比べれば上がってきていることがあるであろう。

また、PFFワークショップの事前アンケートにおいて、最も期待する内容としてライティングを挙げた参加者が最も多かったという事実⁽¹¹⁾は、現在の日本の大学院教育が研究能力の育成には高い効果をあげている一方で、その研究成果を専門分野内外に発信するための能力の育成には十分に答えられていないという可能性を表している。この点は、「教育能力」の育成という文脈に傾斜して議論や実践が行われがちな日本のPFFプログラムに対して大変示唆的である。つまり、PFFのためには、ティーチングとライティング双方の研修機会を保障する必要があるということである。ただし、研修機会を整備するにあたっては、必ずしも今回のPFFワークショップのように1つの研修にティーチングとライティングの双方を組み込む必要はなく、両者を関連させながらも別々に実施することも考えられるだろう。

日本でのPFFプログラム構築にとって喫緊かつ最大の課題は、独自で実施可能な持続性ある体制を整備することである。そのためには次の2点が重要である。ひとつは、プログラムを実施するスキルを持つ人材育成のための仕組みである。持続的なプログラムであるためには外国からの講師に頼るばかりではなく、各大学の人材によって実施できるようにしなければならない。そして、講師を支えるチューターのスキルの伝授も不可欠である。前述のように、第

2回のPFFワークショップのチューターは6名のうち半分が第1回のチューター経験者であり、彼ら・彼女らのスキルは、チューター・ミーティング等を通して新しいチューターに伝授・共有されていった。しかし、次回のPFFワークショップを実施する際にこれまでのチューター経験者が参加可能である保証はない(北海道大学は2011年夏に第3回PFFワークショップを実施予定である)。このことを踏まえると、講師やチューター経験者の知識やスキルを何らかの形で組織的に蓄積し、次の人々に伝えていくためのシステム——例えばティーチングとアカデミック・ライティングを担当するセンターの設置など——が強く求められる。

もうひとつは、英語のみではなく日本語によるPFFプログラムを用意することである。今回のPFFワークショップは全プログラムが英語で実施されたこともあり、参加者数の約60%が留学生であり、日本人学生も海外経験をもつ者が多かったように思われる。これはUCバークレーの講師を招いて実施されたという技術的側面を除いても、参加者の多様性においては有意義であったし、また英語の言語能力によって評価されることは全くなかったが、ネイティブの英語を聞いて内容をある程度理解することが苦手な学生が参加するのは難しかったであろう。国際化の推進や国際的に研究発信する能力向上のために英語で実施する意義は認めつつも、研究を発信したり将来教員として教えたりする際に日本語を主に使用する大学院生も少なくないことを鑑みれば、日本語によるティーチングとライティングの研修プログラムを設ける必要性は高いと考える。

日本の大学において、大学院生のティーチング及びライティング能力を高めるための取組がなされてきていないわけではないが、TA研修に留まらない包括的なPFFプログラムの構築と展開は端緒にすぎたばかりである。ティーチングとライティングの双方を組み込んだ研修を1週間のプログラムとして実施した今回のPFFワークショップは、その先駆けとなるものであったと言えるであろう。

注

1. 1999年に広島大学が「アカデミック・キャリア

ア・ゼミ」として始めたのを皮切りに、2005年に名古屋大学と京都大学、2007年に一橋大学が続き、さらに他大学への広がりがみられる。

2. 夏目達也(2010),「大学院生向けの大学教員準備プログラム(プレFD)」,『文部科学省通信』No.256, 2010.11.22, 26-28

3. 中央教育審議会(2008),「学士課程教育の構築に向けて(答申)」

4. 本稿で報告するPFFワークショップがモデルとするカリフォルニア大学バークレー校を含め北米の大学におけるPFFプログラムは、1993年から2002年に大学院協議会と全米カレッジ・大学協会の共催により全米で実施され、44の博士号授与大学と339の大学が参加したPFFプログラムを踏まえて、各研究大学が独自に行っているものである。全米のPFFプログラムについては、吉良直(2008),「アメリカの大学におけるTA養成制度と大学教員準備プログラムの現状と課題」(『名古屋高等教育研究』第8号, 193-215)等に詳しい。

5. 瀬名波栄潤(2010),「UCバークレーの講師による大学院生のための大学教員養成(Preparing Future Faculty)講座」,『センターニュース』北海道大学高等教育機能開発総合センター, No.83, 4-5

6. UCバークレーにおいては、ティーチング・アシスタントはGSI(Graduate Student Instructor: 大学院生講師)と呼ばれている。

7. 2009年7月に実施された筑波大学・北海道大学共催国際シンポジウム「高等教育におけるプロフェッショナル・ディベロップメント」については、筑波大学教養教育機構(2010),『筑波スタンダードに基づく教養教育の再構築～世界水準の教養教育を目指す全学的取組～中間報告書』,及びCenter for Research and Development in Higher Education(2010), International Symposium on Professional Development in Higher Education (Proceedings), Hokkaido Universityに報告されている。

8. 第1回PFFワークショップのパネル・ディスカッション「国際的キャリアの計画」では北海道大学の蟹江俊二・橋本善春・玉城英彦の各教授及び元世界銀行職員のユージン・ブーストロム氏、第2回PFFワークショップのシンポジウム「国際的キャリア養成への道すじ」では、北海道大学人材育成本部の出村誠教授と工学系外国人留学生教育相談室のウィラ

ワン講師，特別講演「学びにおけるユニバーサルデザインの高等教育への適用」では，カリフォルニア州・ソノマ州立大学のアヤラ准教授が講演した。

9. 参加者は，第2日以降，専門分野（人文科学，社会科学，工学，自然科学，医学など）に基づいて4～6名からなるグループに分かれて着席し，各セッションにおけるグループ活動・議論や最終日のプレゼンテーションはそのグループ単位で行われた。

10. Chickering, A. and Gamson, Z. (1987), “Seven Principles for Good Practice in Undergraduate Education,” AAHE Bulletin 39(7), March 1987, the American Association of Higher Education, 3-7

11. 瀬名波栄潤・安藤厚 (2010), 「第2回「大学院生のための大学教員養成 (PFF) 講座：ティーチングとライティングの基礎」を開催」, 『ニューズレター』北海道大学高等教育推進機構, No.84, 12-13